

【報告】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究

「人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関」第1回公開合評会

日時：2013年6月1日（土）15時～19時

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

3階マルチメディアセミナー室（306号室）

対象図書：佐川徹著『暴力と歓待の民族誌：東アフリカ牧畜社会の戦争と平和』

（昭和堂、2011年）

出席者

著者：佐川徹（京都大学）、

コメンテーター：湖中真哉（静岡県立大学）、床呂郁哉（AA研）

ディスカッサント：河合香吏（司会）、藤井真一（大阪大学）、栗原浩英、古谷伸子、佐久間寛、高島淳、西井涼子、深澤秀夫、真島一郎、三尾裕子、村尾るみこ（以上、AA研）

内容：はじめに著者である佐川氏による著書の紹介を20分ほどしていただき、続いてふたりのコメンテーターによる質問・コメント、それらに対する佐川氏からの応答をしていただいたのちに参加者全員で質疑応答・ディスカッションをおこなった。

本書は、エチオピアとケニアの国境付近に暮らす牧畜民ダサネッチと近隣集団のあいだの戦争と平和の動態を、長期の現地調査を基に鮮明に描き出した秀作である。東アフリカの乾燥地域に広がる牧畜社会では、家畜の争奪などをめぐって紛争がくり返され、自動小銃の拡散により紛争の強度が増している。本書はそうした現実的な課題に対して、その実態を人類学的に記述・分析すると同時に、紛争解決にむけた実践的な提案をもおこなっている。

本書で特筆すべき第一点は、集団間の関係を敵／味方といった一枚岩的に記述するのではなく約170人もの成人男性を対象として、各人の戦争経験や社会関係の詳細に立ち入っていることである。その地道で困難な作業をとおして、人びとは戦いに均質に動員されているわけではないこと、自己の経験に依拠して「戦争を否定する」という決断する個人も存在することが明らかにされている。また、集団間の平和が回復するときには、相手集団とのあいだに個人的な友好関係をもつ人びとが重要な役割を果たしていることが示されている。このように、多様な個人の自己決定と行為選択の蓄積こそが、この地域の戦争と平和の動態をつくりだしているのである。

本書は、人びとが共存を達成するためにおこなう日常的な実践を、多様な事例分析から描きだし、それを「平和に向かうローカルなポテンシャル」として提示し、紛争解決のために外部から介入するアクターは、この地域の牧畜民が有する「他者との相互行為に向かう志向性」や個人間の友好関係を活用することから、より効果的な介入ができることを示唆している。現地調査に根ざした人類学的研究や地域研究が、アフリカにおける平和の構築・維持という喫緊の課題に対して、いかなる貢献ができるのかを具体的に示した本書の功績は、極めて重要である。

合評会の場においても本書はコメンテーターに「無い物ねだりと無理難題を押しつける」というコメントの禁じ手を使う以外にない」と言わしめたほどに完成された民族誌記述であることが確認され、とりわけ、第一章の序論は秀逸であり、紛争、暴力に関してこれほどの叙述ができるのは現在佐川氏をおいて他にいないだろうとのコメントで合評会が締めくくられた。